

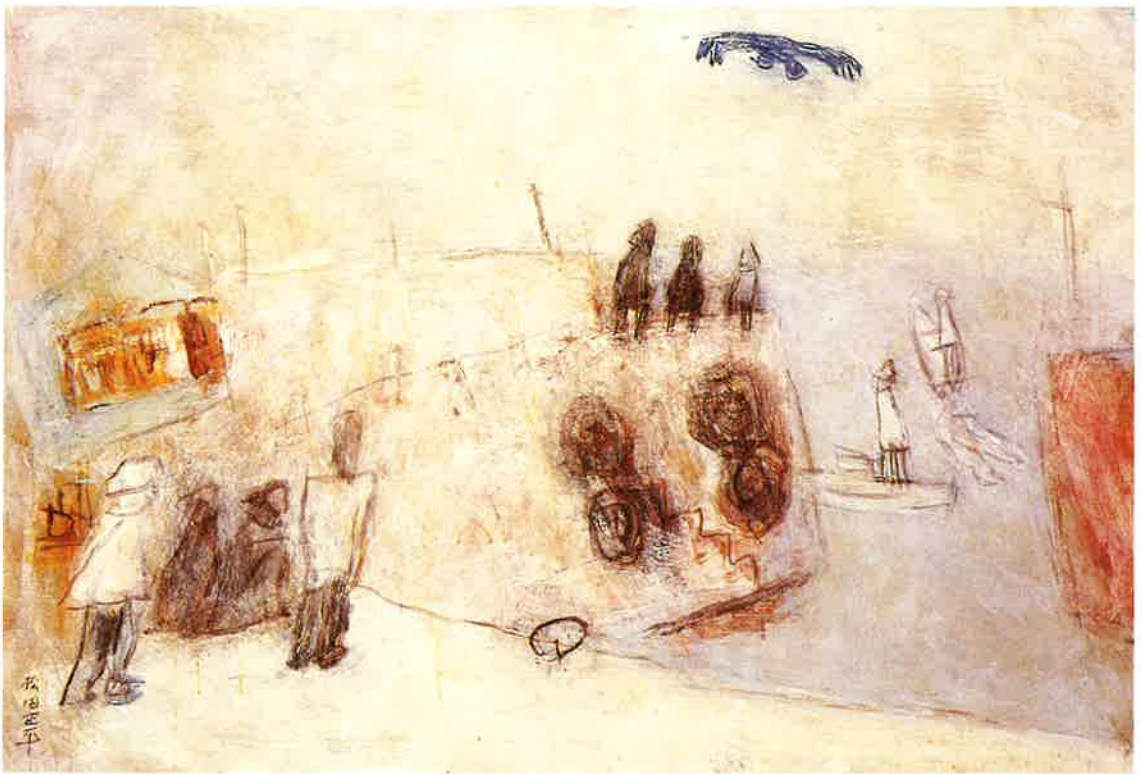
# 天花

TENGE

山口県立美術館ニュース

第33号

昭和62年9月1日  
発行山口県立美術館



松田正平 周防灘

## 表紙作品解説

松田正平

(1913～)

周防灘(祝島)

油彩・キャンバス 80.5×116.7

瀬戸内海には大小さまざまな島がある。祝島もそのひとつ。作者は、その島の港で目にした光景をここで軽いスケッチ風の風景画にまとめている。なにが作者の興味をひいたのだろうか。突堤の先で3人の人物が船の上の男と話しをしている。その光景を岸辺で4人の人物が一心に見守っている。彼らの興味をひきつけているのは案外、他愛のない日常の話題なのかもしれない。頭上をのんきそうに飛ぶトンビ。その一部始終をながめている画家の目。妙にそらとぼけた絵だが、こうした画面が一朝のうちに生まれたものでないことは、たとえば透明感のあるマチエル(絵はだ)ひとつとってみてもいえることである。それに画面からかもしだされる飄逸と詩情。

松田正平は、年に一度きまって初夏になるとこの祝島にわたるといふことでスケッチしたものを千葉県鶴舞の氏の自宅にもって帰り、アトリエで油絵におこす。こうして成ったのが、氏の晩年の画業を代表するいわゆる「周防灘シリーズ」である。本図はそのシリーズのなかでも大作のひとつに教えられる。

現存する氏の最初の海の絵は、東京美術学校に入学した昭和7年の「高津風景」である。その翌年にももう一点「高津風景」がある。いずれも夏の帰省時に益田に住む実姉や縁者のもとに長滞在したおり制作されている。2点は色調はちがうが、構図は似通っており、松のむこうに人家があり、その先に日本海がみえる。その近くで日本海にそそぎこむ高津川。それを逆にさかのぼると、氏が生まれた青原村がある。

ところで、氏の日本海のイメージが肉親縁者の住む益田を介してつちかわれたとすれば、氏を瀬戸内海にむすびつけたのは養家のある宇部市ということになる。が、宇部の作品は戦災で焼け、残っているのは戦後、氏が家族をともない7年ほど寓居した光時代からのものである。

この時期の作品と現在のシリーズとのあいだには、おなじ瀬戸内をモチーフにしても海をえがくマチエルも、海にたいするヴィジョンにも大きな変化がある。現存する油絵や鉛筆素描をみると、たとえば前者では、夕日が瀬戸内の海に一条の光柱をうかばせて沈んでいく様子や、くもつ

た午後、雲間が割れそこから一斉に陽光が放射状におちる様子をえがくものが多い。氏の興味は、気象の変化で刻一刻とすがたを変える海の様相にそそがれている。みる人によっては、それらの作品をえがかせたヴィジョンのどこかに、たとえばカンヌの海浜をえがいたピカソや、沼沢地や海景をえがいたレンブラントやロイスダールのヴィジョンにかよいあうものがあると直覚するかもしれない。近年のシリーズにはそれがない。ないばかりか、何かそらとぼけた人間観察のなかにはリアリズムをかいくぐってきた人がいきつく境地のようなものを感じられる。それは、いいかえれば、近代リアリズムとの格闘の推移のあとを物語っているということができるかもしれない。

「周防灘シリーズ」は、その末にいきついた境地を過不足なくえがきだしているのである。

一九三〇年代の最後の足かけ3年をパリに留学した氏の、そこで背負いこんだ実体としての「近代」との格闘は、内海を日がな一日ながめられる戦後光市での生活とともに止まる。

(安井雄一郎専門研究員)

# 松田正平展

山口の美術ファンのあいだで耳にすることがある。二人の画業を何とはなくくらべてみる習慣、そしてその画質の違いや人物を対照的なものとして理解する習慣がいつの間にか一般的な傾向としてできあがっているのである。

たとえば「山陰の香月、山陽の松田」という評語がある。二人を山口を代表する洋画家だとし、山口を二分する防・長二州の気候、風土、氣質がこの二人の画家にそれぞれ対照的な形であらわれているという意味の評語である。瀬戸内海沿岸、宇部市出身の松田正平。日本海に面する大津郡三隅町出身の香月泰男。かたやばう洋たる「周防灘シリーズ」の画家、かたやモノクロームの「シベリヤ・シリーズ」の画家。作品からくる一般的な印象では、一方は、このうえなくのんびりして明るく、他

方はこのうえなく深刻で暗い。作品のイメージが土地のイメージにむすびつき、こうした評語が生まれたのだらう。

この評語そのものはそれほど古いものではないが、実はこれに類したものをたどっていくと、二人がまだ青年だった時代にまでさかのぼることができる。

昭和初期、美術家をこころざして東京にあつまつた山口県出身者たちは、当時、世田谷の下北沢にあった同郷の先輩、河内山賢祐の家をたまり場にしていたらしい。河内山は東京美術学校の朝倉教室を卒業して、すでに帝展系の新進彫刻家として活躍していた。香月泰男、松田正平は当時はまだその美校に在学している。そのころ二人は、このたまり場で、もうひとつ若い世代の同郷後輩から「知の香月、情の松田」とよばれていたらしい。

この評語は、二人の画家が個性的

な画風を展開させていくずっと以前のころのものであり、したがって、作品からというよりもむしろ当時の二人の風貌や雰囲気のかなかに後輩たちが直感的に感じていたものをストリートに表現したものといいたいだらう。一人の先輩はちよつとつつきにくい理知的な寡黙気をただよわせ、もう一人の先輩はどことなく親しみがあがり情深げに見えたということだらう。

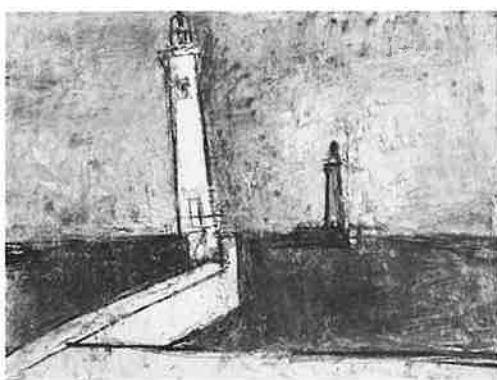
しかし、まだ青年だったころ仲間うちで語られていたらしいこの「知の香月、情の松田」の評語といい、また、その後、ともに独自の画風をうちたててからの「山陰の香月、山陽の松田」のそれといい、評語どうしが時間のへだたりをこえて互いに通じあうものをもっているのは興味ぶかい。しかも、いずれも二人の画家の風貌をどことなくほうふつさせる評語ではある。

とはいうものの、これらの評語が、本当のところ、どれくらい二人の画家のもち味やその芸術の本質を射あてているかについては疑問なしとはしない。真実や事実にかかわるそうした問題と、二人がそれぞれの時期に先にあげたような存在として理解され信じられていたことはおのずか

ら別なことがらであり、この二つが一卵性双生児のようにびったり重なりあうことはまずありえないことだからである。そして往々にしてそうなのだが、歴史のなかで一人歩きをはじめるのは、前者の事実よりも、その事実の周辺に生まれた後者の思い込みや信じこまれたものの方である。真実はついに歴史のなかに埋没する。回顧展が意味をもつとすれば、それは、ひとつにはこうした問題を原点にたちかえって最初から考えてみることにあるのだと思う。



宇部港湾風景 一九二九(昭四)年



▲上右 高津風景 一九三三(昭八)年  
 ▶右 パリの裏町 一九三九(昭一四)年  
 ▲上左 砧風景 一九五八(昭三三)年  
 ◀左 燈台 一九五八(昭三三)年

松田正平は、大正二年、島根県の青原村(現在の日原町)に生まれ、少年期のはじめ宇部の松田家に養子に入り、新川小学校、神原小学校、宇部中学校をへて、昭和七年に東京美術学校西洋画科に入学している。一年先輩に香月泰男、同期に天野芳彦らがいた。ともに藤島武二教室にまなんでいる。昭和一二年に美校を卒業した年の秋、宇部の有志の援助でパリに留学し、アカデミー・コロシアンにかよい本格的なデッサンをおさめる一方、ルーヴルでの模写を介してコロニーに開眼。またレンブラントに魅了され、阿姆斯特ダムまで小旅行をこころみている。留学は五年の予定だったが、第二次世界大戦の勃発で二年にきりあげられ、昭和一四年の冬に帰国した。帰国後、松田正平は梅原龍三郎、福島繁太郎をリーダーとする国画会に出品しはじめ画家としてのスタートをきる。しかし、氏がその国画会入選をはしたしたのは、まさに太平洋戦争がはじまった昭和一六年。本格的な画業をはじめたといっても、あまりに先の見えない時代だった。昭和一七年、山口師範学校に美術教師として奉職。昭和一八年、師範辞職、上京、そして結婚。その翌年、宇部

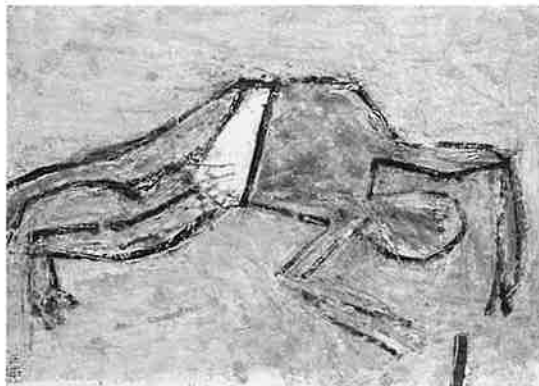
に帰郷。そしていよいよ戦局が深刻化する昭和二〇年、空襲で焼けだされた宇部に養母と結婚したばかりの義妹をのこし家族をひきつれ実家の青原村、そして益田の縁者のもとに疎開し、そこで終戦をむかえた。その後、昭和二一年の春あさいころ、友人をたよって山口県光市に移り住む。

戦後七年ほど仮寓したこの光時代は、おそらく氏の画業の基礎がつくられた最初の時期といえることができる。ヨーロッパから帰国いらいつづいたルオー調の厚みのあるモノクロームの暗いマチエールは瀬戸内のおだやかで明るい風光のもとで、だいにやわらぎ、色数を増していく。しかし、瀬戸内の風土は、これからさらに画境をふかめていくにはあまりにのびやかで開放的だったことが、その原因の一つだったのかもしれない。戦後の混乱がおちつくのを待っていたかのように昭和二七年、家族をともない上京する。

その後につづく昭和三〇年代は、制作の節目からいえば氏の画業の本格的な展開がはじまる時代ということが出来る。そして、現在の画境もここに出発点があるように思われる。昭和三八年、都会の喧騒をさげ東京



▶右上 跳ぶ男 1963(昭38)年  
 ▶右下 ろうそく立てとパイプ 1964(昭39)年  
 ▲上 大威徳明王 1977(昭52)年



から千葉県市原市鶴舞に居を移し、画壇との関わりは、年に一度国画会に出品することだけにとどめ、制作に専念。昭和五九年、第一六回日本芸術大賞を受賞。日常身辺や郷里瀬戸内の海景を画家一流のマチエールとスタイルでえがたい作品は、「油彩に自在、新鮮な世界を切り拓(ひら)いた」としてたかい評価をうけた。

松田正平は頑固なまでに自己の信じる道をつらぬいてきた。画壇や世間からの孤高も、実は自己の画境をふかめることに専念するがための工夫であると同時に、こうした素朴なまでの画道専念の生活姿勢の必然的な結果といえることができる。しかし、そうであるがゆえに、松田正平の画業はこれまでトータルな形では公開されたことが少なく、また氏自身も作品やその生活のきわめて断片的な紹介のみによって、「画壇の仙人」、「画壇の隠者」といった評語でかたられてきた。氏の周辺ではさまざまな人びとの思い入れや願望投影がおこなわれ、つきからつぎに評語や逸話が生産される。氏はそれを意に介することもない。当然、氏の回りは、おびただしい偶像や虚像の「森」と

なる。氏は、新聞や雑誌の自分の取材記事をよみながら、「なかなか本当のことは書かれていない」と、まるで他人ごとのようにいうのである。

今回の回顧展では、宇部中学校時代の習作から最近作まで計一二〇点の油彩画、水彩、素描が出品される。とくに、これまであまり知られていなかった、たとえば昭和一〇年代から戦後まもなくにかけての作品も紹介し、トータルな姿で氏の画業を見ていただけるように構成した。

(安井雄一郎専門研究員)

松田正平展  
 昭和六二年一〇月三日(土)ー  
 一月八日(日)  
 休館日 毎月曜日  
 祝日(体育の日)は開館  
 観覧料 一般 七〇〇円  
 高大生 五〇〇円  
 小中生 三〇〇円  
 \*二〇名以上の団体、  
 各一〇〇円引き

## 師範学校奉職時代

直野 進

戦争が太平洋にひろがり、世情はおいおいに急迫し、学校には軍人教官が配置されていきました。そんな状態の昭和一七年、私どもの在学していた山口師範学校に松田正平先生が美術教師として着任されました。私の学年は直接、先生の授業を受けておりませんので、教室での先生の様子は分かりません。はっきりしているのは、

「絵を教えるなんてとても出来ない」と、学校を一年でやめられたことです。その後四五年のおつき合いになります。唯だの一度も直接、絵についての指導、助言のようなものはありません。ただだまって見ているだけで、たまに「面白くもおかしくもない」という判定が下ります。こんなおそろしいことはありません。先生は、講道館二段をとっておられます。学校対抗の試合に、御老体の柔道教師にかわって部員を引率されたことがあります。水泳もなかなか

か強かったものです。何せあの小柄な体で胸囲が一メートルもあり、柔道のせいか両肩が前にせり出しています。先年（昭和五七年）パリにお共した折り、モンパルナス近くでジーンズの上着のいいのをみつけましたが、肩の具合の良いサイズだと袖が指先一〇センチも余る状態です。いかにきらめざるをえませんでした。ある日、研究室の先生の机の上に女性からの手紙が置いてありました。私どもは、あれはきつと正平さんの彼女だぞと噂しておりました。

職員室で同僚が「羽左衛門」のことを「ハザエモン」とか云っているのを聞いてびっくりしたそうです。放課後この学校でもよく見られた碁打ちに熱中し、さんざんカモにされて覚えた碁碁は、その後ずっと続き、あとあと奥さんの「うちのお父ちゃんも碁ばかり打って」という嘆きの種になります。

教師の給料の使い途がないので、豎小路（山口市）あたりの骨董屋回りをしたのが焼きもの勉強の始まりだとのことでしたが、すでに美校時代、北大路魯山人が古瀬戸の陶片を集めていると聞いて、一人で鎌倉までおしかけたそうです。

この展覧会に出品される「農家」という作品は当時、下宿先の平川村の農家を描かれたもので、学校の研究室に持ち込まれた時、私には理解を超えた不可思議な絵でした。この頃、香月泰男先生の「水鏡」が山口市のちまき屋百貨店に展示されました。田舎画学生の私どもも斬新で深々としたこの作品に感嘆しました。教室の横の廊下に黒っぽい絵が二枚掲示されたことがあります。三号大の水彩でほとんど墨色です。一つは金網をはった箱の中のミニズクで、もう一つは当時、教室の暖房用の火鉢の中の炭火でした。この金網のキツキツとした線（多分ペン）の向こうの暗い空間に光るミニズクの眼と、三つ四つかさなった炭火のカツとおきた赤い色の印象は衝撃でしたが、生徒たちは面食らったものでした。この「炭火」の絵は私がいたでいていましたが、昭和二三年に上京して住宅難の東京で転々とするうちに紛

失しました。申し訳ないことです。師範学校が亀山の真下、山口駅から正面一直線の、今の市役所の所にあり、私たちはそばにあつた学生寮から毎日登校していました。後に学徒動員となり、遂に学徒出陣にいただきます。先生の教えを受けた何人は特攻隊員になりました。

昭和一九年秋、徴兵検査にかこつけて汽車の切符を入手し、北陸を回って横浜に寄り、上白根に先生を訪ねました。奥様とはこの時が初対面で、研究室にあつた手紙の主がこの方だなど思いました。丁度、子息の孫次郎君が生まれて間がない頃でした。しかし、ご長男に「孫次郎」とは、私もいささか驚きましたが、奥様も「この子の名前については友達からいろいろと云われます」とのこと。聞いてみると、能面に「孫次郎」という面がある由。子息の名前はこの面に由来することでした。滞在中の一日、神田神保町にでかけたことがあります。丁度、昼頃ぐらつと地震がきました。町のそこら中に置かれた防火用水の水が一斉に飛び散り、ばやとつっ立っていた私に先生がしがみつきました。上白根のすまいは片田舎の一軒家の農家で、畑や林や大きな竹藪など

にかこまれていて、裏庭の林の中の柿の木が二〇メートルもの高さに赤い実をつけていました。なんだかうす暗い母屋の広い土間が先生のアトリエでした。現在の東海道新幹線の新横浜駅のあたりでしょうか。横浜線菊名と小机の駅名だけは当時のまま残っています。

おりおりに先生からうかがったことをならべてみます。

「セザンヌ、セザンヌというけれどレンブラントを思えばハナクソみたいなものだ。」

パリ再訪のおり印象派美術館で、そのセザンヌの「首くくりの家」の前に立って、「おお、ここで会えたか」と両手を合わせられました。

福島繁太郎氏からスーチンを研究してはどうかといわれて、「そんな

ことをしたら死んでしまう。」

以下、先生の作家評。

スーチン わざとらしいところ

ルオー は一つもない。

分のスキもない。

ルノアール それでどうしたとい

うような作品もある

が、それが人間というものだろう。

モジリアニ 天才というものはい

るものだな。

辛抱に辛抱して理性であそこまで行った。

好きな作家ではない

が、空間感覚は拔群。小品の人物画は最高

だな。

友人に買うことを奨

めようと思ったが、値段が一桁ちがって

いて残念だった。

ドラクロア

寶石のような小品。クレール

実感がある。

ミレー

何であんなに有名なんだ。

モランディ はじめて画集をみた

とき、「これはいい。

ボナールより好まし

い。」……しばらく

して「どこいつて

とりえがない。」……

……またしばらくして

「見直したな。」

チェホフ

「……………」

荷風 「……………」

そして以下は先生語録。

「形の感覚は素質によるところが大きい。」

「自分の素質と食い違う意志を持つことが多い。」

「ほとけ様はああもいえばこうもいう。」

「ほとけ様に助けてもらわなくて

は一枚だって絵はできない。」

「絵具や筆、油など、素材にたいして謙虚でなくてはならない。」

先生はつねづね「実感」ということを強調されます。「物をはなれず、

単なる写生でなく、実在感ともちがう」そして自然の感じを非常に大事

にする。(これは先生の生活全般にわたることだと思われます。)

奥様のこと。

いつでしたか、

「どうも絵かきの女房は亭主の犠牲になりますね」と申しましたら、

「私は犠牲なんかにはなっていない

んよ。私は私の仕事がとても好きだ

からやっています。たまたま私の仕

事はお金になるから、それで暮らし

をたててきました。あんたは、そこ

を間違えてはいけません。」

また、

「絵かきなら自分の勉強にもなると思つて一緒になつたが、それは勉強にもなつたが、えらいひどい目に

あいましたよ」とも。

先生がしみじみと話されたことがあります。「子供のころ、青原から

宇部に出るとき、二頭立ての馬車に乗つて津和野を過ぎ、峠にかかると、

道にかぶさるように茂った桐の葉のかげから太陽がきらきらと光つてい

て、はるか下に津和野の町がみえかくれる。このときの様子は今でも

絵に描けるほどはつきり思い浮かべることができると。このことは先

生の人生、画業に大きな意味をもっているのではないかと思ひます。

鶴舞での生活も、もうながくなりました。アトリエに参りますと、い

つも片隅にレンブラントのテイストの像の複製がほこりをかぶつて掛つ

ています。(画家、東京在住)



コロー 「真珠の女」 模写 1938(昭13)年



# 無限に作品を 生きながらえさせる

足立明男

「美術館は美術作品を展示するところ。美しいものに囲まれて、館員がうらやましい」という声をよく耳にする。そこには、館は展示だけをすればこと足りると考える一般の認識が伺えて、複雑な気分になる。

さて、本館は、建設基本計画の段階で、収蔵庫等の学芸部門のスペースについては、コレクションの第一次収集計画分で当面出発することにし、じっくり実態をみながら長期的構想案を確立した上で増築するという方針で、その敷地も確保して現在の建物が建設された経緯がある。

いよいよ今秋、増築のための二期工事に着工の運びとなった。分野別収蔵庫、備品収納庫・書庫・編集室兼研究室等、延べ千二百平方メートル。この際、美術館の機能の主体が、

華やかな変化のある一過性の展示に目がうばわれる一般の認識に対して、それをささえる調査研究・作品の収集・保存活動といった館のベースになる活動と使命についての理解を深める機会としたいものである。

今夏も例年どおり、常設展は県外からの観覧者の姿が目立つ。香月泰男室に足を運んでみると、三組のグループが鑑賞中、作品の前に、静かに対話を楽しんでいた。熟年婦人四人のグループは、小声で感想を述べ合いながらの鑑賞である。話の中心になっている婦人は、数年前、一度来館したことがあるらしく、香月作品に接したその時の感動が、今回の同窓生を誘っての再来の動機となったようだ。

「ゲヤキ並木の見事な紅葉に誘われ

て、入館し、この室に入ったとき、黒に塗り込められた顔の表情に、胸がしめつけられるような感動を憶えた。その時は、作品は制作年順に並べてあったと思う。明るい画面の作品も数点含まれていたわ」、「今回はすべてシベリヤ・シリーズと呼ばれる作品だね。彼の戦争・抑留体験を絵にしたと聞いたわ」、「終戦記念日を前に対面できるなんて最高。印象的だわ」、「香月泰男の作品は、いつきても鑑賞できるのかしら」、「常設展示でしょう？」少々気がひけたが、口をはさんで、本館の常設展の概要、シベリヤ・シリーズをはじめとする香月泰男作品の館蔵状況と公開のし方、新収蔵作品の初公開などについて簡単にガイドした。

挨拶をし、その場を離れたが、沈黙が続いた。〈雪〉という作品をのぞき込んで見つめるもの、作者のことばのキャプションを読んで作品で確めるもの、〈雪〉と隣の〈別〉を見較べるもの——。またしばらくすれば、小声で四人の対話がはじまるのだろう。離れ際のリーダーのことば。

「またいつの日か、この室を訪れますわ。」

うれしいことばである。

常設展示室を後にして、執務室へ帰る途中、昨秋、突然来館された長野県の付属中学校教師I先生のことを思い出した。京都出張の機に、休暇を一日延長しての来館であった。私自身も、美術館建設準備に入るまでは同業であったので、つい現場の美術教育についての話題に発展しがちであったが、先生の来館の主たる目的は、香月泰男作品の実作に触れることにあった。まだ新任教員時代、美術雑誌で香月泰男の特集を見て、感銘。以来、「自画像」という単元の三年生の授業で、必ず鑑賞作品として、シベリヤ・シリーズをとり上げているとのことであった。実作にはこれまで二、三点しか接してないので、印刷ではなく実作を、自分の目で確かめて授業にのぞみたいという願望であった。時間の関係もあり、限られた点数ではあったが、熟覧された。数日後、実に行きとどいた見事な学習指導の細案がとどけられた。

いきいきとした鑑賞学習場面が想像されるものであった。I先生の真剣な熟覧の様子は必ずや、先生の目と心を通して展開される生徒への発問の一つ一つとなり、それは、受けとめる若い生徒の感性を刺激し、理解を深め、さらに感動へと結びつく、だ





常設展示・香月泰男室 中央が〈雪〉、向って左が〈別〉

ろう。そして先生によって焼きつけられた香月泰男像は、何百、何千の生徒たちの心に残り、やがて、彼らが成人したのち、自らの目で香月芸術の粋を発見するために、あるいは確認するためにこの香月泰男室を訪れることもあるだろう。

この生徒たちや先ほどの婦人グループの人たちのためにも、よりよい保存状態で、香月作品を、またいつの日にか鑑賞してもらいたいものである。美術館がコレクトする作品は、先人作家が、われわれに残してくれた貴重な遺産であり、鑑賞者にとっては生きものである。その大部分は、数十年、雪舟作品ともなれば数百年を生きつづけたものである。これらの作品を後世に継承し、無限に生きながらえさせる責務が、私たちにはある。美術館運営の第一義に作品の収集と保存が上げられる所以である。

本館のコレクションの柱の一つに、香月作品がある。彼の代表作品の保存と公開は、彼がまだ存命中に、本館建設の大きな要素ともなったもので、没後、遺族からの御好意で、シベリヤ・シリーズが県に寄贈された。寄託作品を含めると、彼が終生描いたシリーズ五十七点のうち五十三点

にも上った。したがって、建設構想の段階で、アトリエの雰囲気を加味した性格づけられた展示室が可能となったのである。その後、企画展「香月泰男展」開催の際、シリーズ以外の代表作二十六点が加えられた分散しているシリーズ四点については、本館の最重要収集対象作品であるが、現段階では、その中、二点が購入されたのみである。今後も、香月芸術顕彰のため、必要な作品は時代とともに強化されるべき性格のもので、収集の原則は堅持されていく。年間四回の展示替え。作品は、一回ごとにテーマ性をもって選ばれ、つねに十四、五点が公開される。今後とも、この常設展示は、大きな役割と意義を担い続け、保存科学と学問の力を結集して守られながら、次代に生かしつづけられるであろう。

八月二日に終了した古代エジプト展は、ブームアップして、八万八千人を超える入館者で混雑した。最終日に来館されたライデン国立古代博物館のシュナイダー館長から、期間中の作品管理について、感謝と労いの言葉を受け、引き継ぎの握手ができた。貴重な文化遺産を現状のままバトンタッチできたからである。

(当館副館長兼学芸課長)

# 初期萩焼メモ — 李敬という名への疑問 —

榎本 徹

江戸時代の萩焼については、萩の坂窯、林窯、長門の深川窯などの発掘によって、考古学的な面ではかなりの成果をあげた。しかし特殊な価値感を持ち、それが長い時間に独自の展開をとげた茶の湯という世界の中でひとつの位置におかれつづけたいわゆる「古萩」の伝世品と、考古学的発掘の成果の乖離が大きいことは、ある意味では当然のことで、古窯の発掘だけでなく、同じ西日本の李朝系諸窯の考古学的発掘の成果をも踏まえて、慎重に伝世品を再検討する必要がある。これに関しては、李朝系諸窯がある各地の人たちとの共同研究といったものの必要性を感じる。たとえば、発掘陶片をもちよつての研究会や、シンポジウムなどが考えられてもいい。

この面に関する基本的資料は、江戸時代中期に集録された萩藩の『譜録』で、それによれば、当時藩には四家の焼物師（萩の坂、三輪、佐伯、深川の山村）が召し抱えられており、それぞれが、自家の来歴を『畧系並伝書』として提出している。この各家『畧系並伝書』を基本にすえ、御用窯の展開が組み立てられているのである。

第二次大戦前には、創業に関して数説がとねえられていたが、これは主として、坂家の文書をとるか山村家の文書をとるかの違いで、戦前では、宗家として続いていた坂家の文書がとられがちであったが、現在では、断絶してしまつた山村家の文書のほうが資料としての価値が認められており、これを中心に展開が組み立てられている。しかし、このメモは、その展開をくわしく追うのが目的ではなく、その創業に関して定説

化している「萩焼は李勺光と李敬という文禄・慶長の役の際に渡来した兄弟の陶工によって始められた」という説のうち、李敬という名についての疑問を追うのがねらいである。

山村家文書、坂家文書の二つの文書も、兄弟が渡来しているという点では一致する。この二つの文書の創業期の概略をあげると、兄の李勺光の系統をひく山村家の文書では以下のごとくである。まず兄の李勺光が文禄元年に渡来し、やがて萩、松本の中ノ倉で陶業を始め、妻帯し、男子一人をもうけた。弟はおくれて呼ばれ、寛永二年十一月二十一日に坂本高麗左衛門に任せられた。李勺光の子の山村新兵衛光政は父と同じ五人扶持二五〇目を給され、<sup>き</sup>黛新山御用焼物所の惣都合として作之允に任せられ、その後、坂本高麗左衛門は焼物師に、ならびに山村の弟子五人も御雇になった。光政はのち法体して、正庵と改めた。

弟の系統をひく坂家の文書では以下のごとくである。高麗左衛門は輝元公が朝鮮から帰陣する際に夫婦で渡来した。本国での名はわからない。始め坂本と称し、のちに坂に改めた。寛永二年十一月二十二日に高麗左衛門に任せられた。兄は名は知らない

が、日本に渡って、男子をもうけ、幼少の時から坂家でこれをあずかり、やがて、山村作之進に任せられた。高麗左衛門は寛永二〇年二月二日に五八歳で死んだ。

この二つの文書では、やはり山村家の文書をとるべきであろう。たとえば、萩藩の藩士の俸禄の記録である『分限帳・無給帳』のうち正保二年の分限帳の記述を見てみよう。

細工衆  
扶持方 寺人米三石六斗  
同 三人米七石六斗  
同 坂 助八  
同 三人米四石  
同 藏崎五郎左衛門  
同 三人米二石二斗  
同 松本ノ助左衛門  
同 五人銀子貳百五拾目  
同 山村松庵  
同 式人切方無シ  
同 松本ノ勘兵衛  
同 式人切方無シ  
同 同所 助右衛門

時代はすこしずれるとはいへ、俸禄高や、松庵、坂をのぞいて五人であることなどが山村家文書と一致す

る。また、山村と坂をふくめた他の六人の俸禄の差にも注目したい。山村家の格が他の陶工より数段ちがうことが確認できる。さらに、山村家文書では一日ちがいがらも、任高麗左衛門の日をあげている。ただ、姓を坂ではなく、改姓前の坂本を利用しているのが注目される。

坂家文書の輝元帰陣時の渡来説は、同文書の、寛永二〇年、五八歳死去から逆算すると八歳での夫婦渡来ということになり、これだけでもとりづらい説である。やはり、山村家文書にあるように李勺光よりおかれて呼ばれたと考えるほうがよさそうである。また作之進も作之允の誤りであろう。

ところで、この二つの文書とも、先に述べた定説のうち、李敬の名が出てこないものである。李敬の名が見えるのは、『本朝陶器攷證』においてなのである。

『本朝陶器攷證』は金森得水が書いたもので、安政頃には完成していたらしい。はじめは写本で、のち孫によつて六冊の和本として明治二七年に刊行されている。

このうち萩焼の関することは、八代坂新兵衛が、嘉永元（一八四八）年と嘉永二（一八四九）の二回にな

たつて回答したものである。以下にその一部を抜粋する。

#### 長州萩焼

一元祖高麗左衛門と申候、朝鮮の生れ李敬と申者なりしが、朝鮮御征伐之時道しるべを致し候所、すぐ様当國中納言の君召しつれられ、

日本へ渡海仕り助八と申せしが、御帰国の後、其方向業仕候哉と御尋の所、半弓を射又陶工をいたし候由を申上る、御悦少なからず長く我國の宝にておわすれとて、長門の松本と云所へ、家屋舗を給はり、則今以其所にて製す、追々君の御印物等拝領仕、血脈相続いたし、当時新兵衛八世に相当り申候、山号を韓峯と申、俗に唐人山と申す、右高麗左衛門と申は君より給りし名なり、氏は坂と申は松本焼物本家筋に御座候

#### 一松本焼林家

杯家元祖半六と申者、長州家中佐伯某の次男なりしが、（中略）

#### 一同三輪家

此元祖弥兵衛と申者、大和国三輪の者なりしが、（中略）

右両家とも唐人血脈には無御座

候嘉永元年申四月

坂新兵衛

#### 一深川焼之事

元来高麗左衛門弟子にして山村松庵と申候、茶入師に同国へ召抱られ深川へ引越、其後故有て知行めし上らる、当時深川焼の義は、坂の弟子内坂倉万助と申者焼立当代善右衛門と申候

#### 一長州萩焼再答

萩松本元祖坂高麗左衛門道忠朝鮮にては李敬と云、渡海の節船中にて助八と改め、其後高麗左衛門を給ふ

#### 二代坂助八忠季（中略）

#### 一古萩之事

古萩と云は初代より三代頃を云傳へ申候、林三輪等脇窯之義は菓立傳來差引有之候に付、現物に当り候はでは相分りがたく、松本焼と申は他国に出候てははぎ焼、国本にては松本焼と唱へ申候、松本と申は萩の内所の小名にて候、今世上にては別窯のやうに申候得共、全私家筋の外窯所無之候

#### 一鬼萩之事

荒土白薬を鬼萩と申候、当時も同じ事に候、土薬ともに往古より其物其品により、口傳を以相調へ来り候、倉崎某と申者、元祖の弟子

内に有之、往古深川へ引越候、雲州へ参り居候倉崎権兵衛は、右倉崎の一族にて候、当時の倉崎は貞之進と申候嘉永二年西四月

坂新兵衛

以上が坂新兵衛の回答の大部分であるが、まず、これと山村、坂の文書が書かれた明和四（一七六七）年と明和二（一七六五）年との間には一〇〇年近い時間的なへだたりがあるのに留意しておきたい。

この回答の基本的姿勢は、坂が萩焼の本家であることを強調することであり、そのことは抜粋だけでも随所にうかがわれる。

まず自家の来歴を記し、その末尾に本家筋であることをのべ、つぎに他家にうつり、林家、三輪家とも朝鮮からの渡来人ではないことを強調している。これに関しては、山村家、坂家と同時期に三輪家も藩に文書を提出しており、そこには先祖が朝鮮から渡来したものであることが明記されており、大和三輪説はとりがた

い。

また、山村松庵を高麗左衛門の弟子としているのも、本家であることを強調するためにしたものであろう。初めの自家の来歴についても、明

和の自家の文書をもとにしているこ

とは、たとえば、「半弓を射」などが一致することから明らかであるが、明和の文書では松庵は兄の子であると記されており、それを弟子にすることは、この文書自体、さきの基本姿勢からの作意がかなり強いと考えざるを得ない。たとえば、大和三輪説も、単なる地名との連想にすぎなかったのではあるまいか。

そこで李敬であるが、これが認められるかどうかのききは再答部分にある。嘉永元年の時点では、「朝鮮の生れ李敬と申者なりし」とだけしか書いていないが、再答では、「朝鮮にては李敬と云、渡海の節船中にて助八と改め」と改名の時期を書いているのである。そして、このことが、李敬という名が確実なものでないことを雄弁に物語っているとされるのである。

つまり、李敬という名だけが出てきたのであれば、あるいは別の新資料の存在も否定しえないかもしれないが、「渡海の船中にて」というような記述が、あとから追加されるようでは、このこと自体を創作と考えたほうがわかりやすい。俗に言えば、再答によって前説を補強しようとしたが、かえって馬脚をあらわしたも

のと見ることができるといえる。

それでは李敬という名はどこから来たのであろうか。私はおそらく、李勺光を借用したのであろうと考え、兄の子松庵を弟子にしてしまつた以上、李勺光の名を借用しようと考えるのはそう無理がないと思われる。ここからは、まったく私の想像であるが、そのまま使つたのでは李勺光について知る人もいるので、二字を一字にすることを考えたのではあるまいか。つまり、勺と光を横にならべたらどうなるか。「號」これを「敬」にしたのではあるまいか。

この想像はさておき、李敬という名がきわめて実在の可能性のうすい名であることは、回答全体を検討すれば容易に理解できることである。ただこのようなことがおこるのも萩焼の歴史の変転によるものであることは記憶されている。本来本家である山村家が松庵の敵討ちによる死、その子と弟子筋の深川への移住、やがては山村家の断絶という事態、松本に一家残った坂家の苦難は想像にあまりある。しかし坂家はそれをのりこえ、山村家にかわつて宗家の地位を確立したのである。八代高麗左衛門は、この回答によって、宗家としての地位をより強固にしようとした

のかもしれない。その強い思いが、元祖の名を欲したのであろう。

くりかえしになるが、李敬という名は、きわめて実在性のうすい名であるが、李勺光の弟が存在し、高麗左衛門に任じられているのはほぼ認めうるのである。今後の課題としては、やはり、李勺光に関する追求が必要と思われる。この名も、山村家文書以外に見ることができないし、文書は、李勺光という名の人物がいた時代から一〇〇年ほどものに書かれたものである。

(当館学芸課主任)

#### 註

- (一)萩焼創業に関して、山村家文書による意見は、早くは近藤清右が「霜堤雜草」で言及しており、これをうけ山本勉は「萩の陶磁器」で山村家文書をとるべきであることを主張している。また「本朝陶器攷證」を、「陶器大辞典」巻五から抜録しているが、李敬という名に疑問をいだいている様子はなく、「陶器大辞典」が「本朝陶器攷證」の項で、これを「最も信頼するに足るもの」としているためであろう。
  - (二)山村家文書では正庵であるが、「分限帳」などに出てくる松庵をとるべきであろう。
  - (三)このことはすでに古萩展図録(当館、昭和五年)の「萩焼」萩藩窯の成立と発展」の中で河野良輔によって指摘されている。
- 四坂新兵衛の回答のほかに、得水筆と思われる萩に関する記述が、本書の他の巻にある。

## 美術館から

### 移動美術館

毎年、周防・長門部各一ヶ所で開催している移動美術館を、今年はずきのように実施します(入場無料)。

#### 会場・会期

○上関町中央公民館(熊毛郡上関町) 11/12(木)~11/16(月)

○田万川町勤労者体育センター(阿武郡田万川町) 11/19(木)~11/23(月)

#### ▼タイトル「美と出会うとき」

私たちの体験のなかで、絵画や彫刻と向きあうことは、どのような意味があるのでしょうか。具体的な作品をとおして、その「出会い」の意味について考えます。

### 山口県立美術館ニユース

#### 「天花」

第三三三号

昭和六十二年九月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753 山口市亀山町三二一

☎〇八五—五—七七七八

印刷 瞬報社写真印刷株式会社